

「園比屋武」「金比屋武」の出自に関する考察

橋 尾 直 和

1. はじめに

沖縄県那覇市の首里城にある守礼門と歓会門との中間に、園比屋武御嶽石門がある。石門と周辺一体の森のことを総称して園比屋武御嶽^{そのひゃんうたき}といった。石門は、尚真^{しょうしん}（在位1477－1526年）によって1519年に創建された。築造者は竹富島出身の西塘^{にしとう}である。

園比屋武御嶽は、国王が首里城を出て各地に巡行する際に安全を祈願した拝所で、琉球国最高位神女である聞声大君^{きこえ おおきみ}の即位式の際にも最初^{さいしょ}にここでお参りし、斎場御嶽^{せいふくうたき}へと向かった、国家行事や祭祀と密着した重要な御嶽であった。

御嶽の名称に使われている「園比屋武」という語は、尚清王代の嘉靖10年（1531年）から尚豊王代の天啓3年（1623年）にかけて首里王府によって編纂された歌集である『おもろさうし』に現れ、別称としての「金比屋武^{かなひゃん}」という語も登場する。

「園比屋武」「金比屋武」について、折口信夫氏は「琉球王国の出自」（折口 1937／谷川 2012）において言及しているが、語源の解明までは至っていない。筆者は、『おもろさうし』に謡われるこれらの語を古代朝鮮語と比較することによって、その源流をつきめることができた。本稿において、これらの出自について解明したい。

2. 『おもろさうし』における園比屋武・金比屋武

首里城近くにあった園比屋武の別称である金比屋武と同じ名前の拝所が、今帰仁グスクにあることが、次の『おもろさうし』（以下『おもろ』とする）から見て取れる。

卷13－912

一 今帰仁に 立つ雲	今帰仁に立つ雲
金雲 立ち居り	金雲が立っている
大君に 追手	大君神女に 追い風を
乞うて 走りやせ	乞うて船を走らせよ
又 金比屋武に 立つ雲	金比屋武に立つ雲
銀雲 立ち居り	銀雲が立っている
大君に 追手	大君神女に 追い風を
乞うて 走りやせ	乞うて船を走らせよ

この『おもろ』について、折口信夫氏は、「琉球王国の出自」（折口 1937／谷川 2012：74－75）において、以下のように述べている。

完全にみやきせんとかなひゃふとは対句である。考え方によれば、かなひゃふは今帰仁の異名とも言えるが、同類異称を並べたのではあるまい。少なくとも、「今帰仁」と言う語に対して言っ

たので、その地の中の小区域か、あるいは全然対照的になって考えてよい別地か、判断出来ない。が、詞章から見れば、大君は大巫であり、風をつかさどるものと考えたのである。普通なら、聞得大君が風の句―尚順翁、聞得大君御殿に関する談話及び、伊波普猷さんの『おもろさうし選抜』―であったのだから、それと考えることが出来る。だがこの場合、それをやや低くした大巫である今帰仁のあふりゑを言うものと見てよい。そうして、その崇所なる今帰仁城内上之嶽の神名をてんつぎのかなひゃふの御いべとある。旧記には、天継奴金比屋武威部と「ふ」に当る字がない。が、山北旧城今帰仁城上嶽に立つ雲をおしのけて、「みやきせんにつくも」といい、おなじ小地名をおしのけて「かなひゃふにつくも」と重ねて言ったものに違いなからう。

近い本部間切にも『かなひゃ』森がある。伊野波村嘉那比屋森（神名 世々志威部）。由来記には、かなひや森、神名、よゝせの御いべとある。久志間切古知屋村に、かなひやご嶽（加那百嶽）神名、よみちよの御いべ（弓忠威部）、越来間切上地村かなひやん嶽、神名まねづかさの御いべは、嘉那平安嶽と表記してある。

こうして見ると、かなひやん・かなひやふ・かなひゃく・かなひやは明らかに一根の語といつてよい。そうしておそらく、そのひやんと対句のような関係にありそうである。

かなひや嶽のあった伊野波の近村嘉津字村の、そのひやん嶽（園比屋武嶽）、神名こばのわかつかさの御いべがある。

この外、八重山島武富村―竹富島の国仲根所（神名なし、御いべなし）の神は、「そのひやふの御神勧進也」とある。これは、宮古郡・八重山郡に類例のある、沖縄本島その他から御渡りのあった神々の中の一つである。恐らく遙拝というべきものだろう。

次に、金比屋武が現れる他の『おもろ』の例を挙げてみたい。

巻4-164

一 聞ゑ煽りやへや	名高い煽りやへ神女は
中神に 手摩て	中心の神に祈って
按司襲いしよ	国王様こそ
手摩て 栄よわれ	祈って 栄え給え
又 鳴響む煽りやへや	名高い煽りやへ神女は
金比屋武に 手摩て	金比屋武に祈って

この『おもろ』の岩波文庫の脚注には、中神について「神名。中心になる神。今帰仁城の神のことらしい」とある⁽¹⁾。「金比屋武」については、「今帰仁城の中の拝所名。首里城正門前にある拝所園比屋武の異称としても使われる」とある。どちらとも判断がつかないということであろうか。

ところで、「中神＝金比屋武」を祈るのが「煽りやへ」であることは偶然ではない。「煽りやへ」は、もともとは今帰仁の最高神女の名称であり、聞得大君職成立以前の最高神女職名である。今帰仁ゆかりの名を持つ神女が、今帰仁の神を祈るのは自然なことである。

なぜ聞得大君職成立以前の最高神女名が、今帰仁に由来するのか。ここに、第二尚氏と今帰仁の繋がりを見い出すことができる。

たとえこの『おもろ』の金比屋武が首里金比屋武であったとしても、今帰仁の最高神女であった

「煽りやへ」が祈るとされていることを考えれば、今帰仁金比屋武もまた重なり合っているであろう。

ところで、園比屋武の御嶽と同名の御嶽が伊是名島にも存在する。琉球王府の『延喜式』とも言える『琉球国由来記』の巻16には、伊是名島の勢理客にあるタノカミ（田の神）嶽御イベの神名として「ソノヒャブ」がある。

以上の、園比屋武と金比屋武の関係を整理すれば、次のようになる（吉成・福 2006：68）。

首里＝金比屋武御嶽→今帰仁グスク

園比屋武御嶽→伊是名島勢理客のタノカミ嶽のイベ名

首里と今帰仁、伊是名を結ぶ構図は、まさに聞得大君の神名をめぐる現れた構図であるといえる。

『おもろ』のなかで園比屋武が現れるのは、二例のみであり、ともに金比屋武が連続して用いられている。

巻3-91

又 京の内杜ぐすく	京の内杜ぐすく
威部の祈り しよわちへ	威部の祈りをし給いて
又 石子は おり上げて	石垣を積み上げて
板門 げらへわちへ	板門を造り直して
又 園比屋武は 金比屋武は	園比屋武では 金比屋武では
司祈り しよわちへ	司祈りをし給いて
又 真石子は 積み上げて	石垣を積み上げて
金門 建て直ちへ	金門を立て直して

この『おもろ』では、「園比屋武」「金比屋武」は「京の内杜ぐすく⁽²⁾」と対語をつくっていることから、園比屋武と金比屋武は、神聖なる場所ということになる。

首里の園比屋武御嶽＝金比屋武御嶽の造営、あるいはその門の造営をすることの意味は、「始原の世界」を立ち上げることにほかならない。ここで言う「始原の世界」とは、園比屋武御嶽＝金比屋武御嶽を第二尚氏の尚真王が造営したことを考えると、「第二尚氏の始原の世界」といことになる。ここに隠されている意味は、園比屋武御嶽＝金比屋武御嶽の始原の地である「今帰仁のグスク」を立ち上げるということである（吉成・福 2006：71-72）。

他の「園比屋武」「金比屋武」が謡われる『おもろ』には、次のものがある。

巻7-363

一 聞得大君ぎや	聞得大君が
末 尋めて 降れわちへ	太陽神の末裔を求めて天降りをし給い
成さい子思い按司襲い	父なる国王様と
御顔 合わちへ	お顔を合わせると
おもかしやど 実に ある	実に立派な方である
又 鳴響む精高子が	聞得大君（鳴響む精高子）が
真末 尋めて 降れわちへ	太陽神の末裔を求めて天降りをし給い

（中略）

又 おぼつ君々や	おぼつ君々神女は
大君は 祈て	聞得大君はお祈りして
首里杜 降れ欲しや	首里杜に天降りしたがっていることだ
又 神座神々や	かぐら神々神女は
精高子は 宣立て	聞得大君はお祈りして
真玉杜 降れ欲しや	真玉杜に天降りしたがっていることだ
又 園比屋武 金比屋武は	園比屋武 金比屋武は
杜ぐすく げらへて	杜ぐすくを造営して
天降れ子の そこらしや	天降りした子の喜ばしさよ

これらの『おもろ』から導き出されることは、『中山世鑑』巻一「琉球開闢之事」に現れるアマミキョ、沖縄島の北から南に向かって森や御嶽などの数多くの聖地を造営したとされる国土創世の話とつながることである。聖地とは、始原の世界、祖型的世界に立ち帰る場所のことを指す。

「園比屋武」「金比屋武」について、折口信夫氏は、「琉球王国の出自」（折口 1937／谷川 2012：58－60）において、以下のように述べている。

伊波普猷さんには、以前から今日に至るまでどんな幼稚な問いにも御返事を頂いている。だがこの文章を書きはじめた山形県の山中では、この親切な忠言を聞くことが出来ない。出発点において、まず不安を持つ。第一には、嶽名の「園比屋武」なる語の意義である。すべての語が、語原説明から研究しなければならぬいわれはない。だが、この場合、この語が元々の固有名詞でない性質上、その値に冠らした必ず説明のつく理由のある部分は、理解ができるのではないかという気がする。そのひゃふ・そのひゃん・そのひゃくなど言う語形が、いずれを原形としているかは、私にはわからない。ただ、この地名が、偶然首里にあり、又他の地方にもあったと見るべきか、あるいは嶽としての讃え名に、こういう一類の表現があったと見るべきか、この二つの考え方の外に、今一つ、他所からの住民移動の招来物といしてたずさえて来たものとする考えも成り立つはずだ。そうすれば又、首里ばかりでなく、おなじ団体移動の後にはなお稀に同一の名を残しているかも知れないのである。

たとえば、伊平屋伊是名の島にある「そのひゃむ」は、元の勢理客村にあって、

タノカミ嶽御イベ 神名ソノヒヤフ

とある。

伊平屋尚氏の太祖以来、田の伝承を多く持つ島だけに、これも「田の神」に連想せられていたのはもとよりである。

「みせゝる」

……にるやとよむ かなやとむ にちりきよ きみきよら、七の神 七のぬし

やちょこひき 眞人ひき、田の神のそのひゃふ、いべのぬし いべのつかさしられらは、のたてらは、きくにうけれあふにうけれ……』

又（伊瀬名浜の分）、

田の神のそのひゃふ、いべかぬし つかさぬし まきよの数 くたのかず まきよやぜる大

ころくだやせる もちやいちよ……』

(中略)

首里にある御嶽も、なるほどそう言えば、由来記にも御嶽とはなく、

ソノヒヤフノ御イベ 神名モジロキヨウ ニギリキヨウ 真和志村

旧記には、「母自慮休拓」と言う風に当てているが、真の神名は、もじろ・にきりの対句で、きようは、ある種の神を表す語尾である。「舅」など、よく当て字する称号なのだ。

由来記には、嶽名・いべ名・神名の三つ揃ったものもあるが、八重山島ほどことごとく正式に揃ったのではない。だから必ずしも、そうした形が最も原則的なものとも言われず、まして「いべ」なるものの元来の性質「いべ」と称すべき種類のもの、元々そう言わなかった理由のあるものと、当体自身に相違があるものと思われる。だがそれが根本から理解出来たところで、一律をもって推していけるほど、正確な観念が基礎に横たわっているとは思われない。それほど時間、空間、あるいは理解の相違が、交錯しているのだ。

ただこれだけは言えよう。「そのひゃふ」と言うのは、伊是名島の場合のように、神名と考えられたらしいものもあるが、大体森の名ー嶽名ーと理解されていた事は確かである。

(首里) ソノヒヤフモリノ 御イベ。神名 モジロキヨウニギリキヨウ

(伊是名) タノカミタケ 御イベ。 神名 ソノヒヤフ

神名は、概してその嶽森の神を純化し、宮廷史記に考えた時の称号と考えるのが適当なようだが、よく見ると、古代の君・祝の名を伝えているものらしく思われることが多い。更に一步を進めて言えば、それが地方的な政権を持った司祭者とも見るべき、男性の名であることもあるらしいと思われることである。そうすれば、そういう種類の名を持った嶽森に限り、結局、これらの地方権威者の墳墓の様にも考えられないではない。が、それよりももっと第一義的なものがあることを考えに置いてかかった方が、正しいのではないだろうか。すなわち、それぞれの地方巫覡の威力の源たる神ー靈威ーの力の存するところで、それが発現して、宗教上の人格となると見るべきであろう。この考え方が、無限というべき程に延長せられたのが、琉球神道の上における「神名」なのである。

3. ^{そのひゃん}園比屋武・^{かなひゃん}金比屋武の語源

では、「園比屋武」「金比屋武」に見られる対は、何を意味するのであろうか。筆者は、そこに園神と韓神の対とパラレルな関係が存在することを発見した。

奈良県にある漢国（韓国）神社の祭神は大物主命（園神）・大己貴命（韓神）・少彦名命（韓神）の三神だと伝えられている。この漢国神社の「漢」はkaraを表記したものである。「漢国」は元来、kara-kuniの表記で、「韓国」の異表記である。「漢」がkaraの表記であるのは、韓国の地名でも同じで、「漢岐部又作韓岐部」（『遺事』1. 新羅始祖）に韓岐と対応表記された「漢岐」はkara-kiの表記であることが分かる。

鎌倉時代後期に編まれた『塵袋』巻一（天象・神祇・諸国・内裏）には、「宮内省も二柱の神といはれたまへり。一つには園神、一は韓神なり。それを一所におはしませば、とり合わせてソノカラカ

ミとはいふなり」とある。二柱を合わせてソノカラカミと呼んでいる。

金澤庄三郎氏は、このことについて、「園韓神は朝鮮に関係のある神といふことは断言し得ると思ふ」と述べ、二神を韓国の系譜と見なしている（金澤 1943：180）。また、素戔鳴尊が天降った新羅の曾戸茂梨については、「戸を除けるソモリは、徐征伐即ちソホリと音均上一致」していると述べ（金澤 1943：211）、さらに、曾富理神が「新羅即ちソホリの神であることは疑いがない」と結論づけている（金澤 1943：218）⁽³⁾。

園神は、sono-kamiの表記で、sonoはsono-bori〈首邑〉〈京〉のbori〈邑里〉が省略され、soro〈首〉がsonoに変化したものである。soro>sonoになる例としては、対馬阿連の地名「園原」soro-baru>sono-baruがある。sono-kami（園神）は、soro-boriの神から変化した語であり、この神は*so-hori（<*so-bori）kami（曾富理神）と同源の名である。すなわち、sono-kami（<soro-bori kami、boriの省略）=so-hori kami（<soro-bori kami、roの脱落）の関係になっている。したがって、sono-kami（園神）は『古事記』に見える曾富理神であろう。

『古事記』によれば、大年神が神活須毗の娘、伊努比売と結婚して、先に大国御魂神を産み、次に韓神を生み、次に曾富理神を生み、次に白日神を生み、次に聖神を生んだという。この大年神は、穀霊の神であるという。この5人の兄弟がすべて韓神（新羅系）であるが、次男を韓神としたのは、その名が明らかでないので、ただ韓神だとしたのであろう。そして、曾富理神は園神で、次の白日神は、新羅神で、その次の聖神は日知の神、すなわち暦神をいう。

このsono-bori（<soro-bori）〈首邑〉〈京〉は、どこに比定されるべきであろうか。筆者は、新羅の首都、徐羅伐（*səra-bərə）に比定されるものと考える。

倉野賢司氏は、韓神を「文字通り韓（朝鮮）の神の意か」と注釈している（倉野校注 2007：54）。三品彰英氏は、園韓神が大物主命と少彦名命が、韓神・曾富理神に相当するとし、「曾富理は新羅の国名ソフルに由来する語である。韓神が別名ソホリノ神とも呼ばれたのであろう」と述べている（三品 1972：106）。折口信夫氏は、韓神は渡来神ではなく、日本の民間で祀られていたとしつつも、曾富理に関しては、「朝鮮系統の語にちがいない」と述べている（折口 1971／谷川 2012：83）。

園比屋武の語源は、どのように解釈すればよいであろうか。折口信夫氏が、「そのひゃふ・そのひゃん・そのひゃくなど言う語形が、いずれを原形としているかは、私にはわからない」としたこの語の語源であるが、筆者は、「ひゃん」を「郷」と捉える。すなわち「そのひゃん」は、「園郷」sono-çaŋと解釈する。「ひゃん」は「ひゃんが」（郷歌）⁽⁴⁾・「ひゃんちる」（郷札）⁽⁵⁾の「ひゃん」çaŋと同義である。したがって、「郷」は、sono-bori〈首邑〉〈京〉のbori〈邑里〉と同義と見なすことができる。

金比屋武の語源は、どのように解釈すればよいであろうか。筆者は、「金比屋武」の「金」kanaは、kara〈大〉から変化したものと見る。この変化は、ヤマトの地名でも確認できる。

kana-tsu（金津）（石川県河北郡）

kana-tani（金谷）（全国各地）

kana-gawa（神奈川）（神奈川県）

kana-e（金江）（全国各地）

kana-sawa (金沢) (石川県)

これらの地名は、「大津、大谷、大川、大江、大沢」に由来したものと考えられる。

したがって、金比屋武は「金郷」kana-çaŋ (<kara-çaŋ 韓郷) <大邑里>と解釈できる。

巻17-1201は、この「郷」çaŋ <邑里>を謡ったものと思われる。

一なかひやにや おわる

あれにしやよ

今ど 降れて なよる

又せとひやにや おわる

あれ

吉成・福(2006:153)では、この語について、「なかひやにや」「せとひやにや」の「ひや」は「田圃」の意味であり、「にや」は接尾辞である。したがって、このおもろの意味は、「田圃(親田)でもあり聖空間でもある「なかひや」「せとひや」にいらっしゃる「あれ」という神女が今こそ降臨し、舞い踊る」と解釈することができるとして、以下のように述べている、

「ひや」を「田圃」の意味に解するのは以下の理由による。

首里、今帰仁の園比屋武、金比屋武の「ひゃぶ」の語形は、「ひや」「ひやふ」「ひやぶ」「ひゃん」「ひゃん」である。伊是名島の「ソノヒャブ」は田の神嶽御イベの神名であり、尚円(金丸)の奇跡の田の水の話は『琉球国由来記』の伊是名村の「玉城ヒヤ 俗におや田と云也」という項目に記されている。このふたつの資料による限り「ひや」とは「田圃」を意味する言葉と考えられるのである。

筆者は、『おもろ』巻17-1201の「ひやにや」は、「ひやに」までが「郷」çaŋ <邑里>を表し、「や」は係助詞と解釈したい。したがって、先の「ひや」は「田圃」の意味であり、「にや」は接尾辞である、とする解釈には賛成しかねる。また、伊是名島の「ソノヒャブ」は田の神嶽御イベの神名であり、尚円(金丸)の奇跡の田の水の話は『琉球国由来記』の伊是名村の「玉城ヒヤ 俗におや田と云也」という項目に記されている。このふたつの資料による限り「ひや」とは「田圃」を意味する言葉と考えられるのである、という解釈にも賛成しかねる。

原形は「ひゃん」であるので、「ひゃん」の語義から考えるべきで、伊是名島の「そのヒャブ」が田の神、玉城ヒヤが親田と比定できたとしても、それは派生的な意味である可能性が考えられる。これまで挙げた、園比屋武、金比屋武が現れる『おもろ』から判断して、「郷」çaŋ は、<邑里>から<造営地(開墾地)>さらに<田圃>へと、意味が派生したものと考えられる⁽⁶⁾。

以上のことから、「園比屋武」とその別称としての「金比屋武」の出自は、新羅語に求められることが分かった。このことは、橋尾(2012b)において、「按司」が新羅語で「主者」「王者」に対する称号を意味する「閼智(アルチ)」と同源であり、*ara-ti>*ana-tiという語形変化を遂げたことに由来するとする筆者の説に合致する。

4. 首里の語源

「首里」の語源について、イギリスの言語学者、B・H・チェンバレンが、朝鮮の「京城」との間

に音韻と「都」という意義の類似のあることから、両者の間に何らかの関係があるとした説を唱えた。この説に対して、伊波普猷氏は、次のように「民衆語源説」に過ぎないと看破している。

首里と京城（セウル）との関係をつけようとして、矛盾に陥られた。といふのは、さうすると、新羅時代以後、地名の発音が変化した頃のセウル人が南島に移住して国を建てた、と見なければならぬからだ。これは到底考へられないことである。

これについて、金達寿氏は、首里城の「守礼門」も、ソウルの南大門が「崇礼門」であるのと同様であると解釈している（金 1989：272）。

筆者は、「首里」の語源は、新羅の首都である徐羅伐（*səra-bərə）に比定し得るものと見なす。*səraは〈首〉、bəraは〈城邑〉あるいは〈村里〉、*səra-bərəは〈首城〉〈首邑〉〈首都〉〈京〉を意味する。〈首〉を表す*səraは、さらに*saraにさかのぼる。そして、この*saraはsuriへと変化する。この*sara>suriを由来とした地形名が韓国と日本に確認できる。

（韓国）

suri-san 〈首山〉、suri-boŋ 〈首峰〉、suri-tse 〈首嶺〉、suri-ne 〈首川〉 など

（日本）

suri-gawa（駿河）、suri-bari（磨鍼）、suri-batsi（播鉢）（富士山） など

筆者は、新羅の首都である徐羅伐*səra-bərəの前身である*sara-bərəの*sara〈首〉が*sara>sora>soro>suru>suri>ŋuri「しゅり」となり、〈城邑〉あるいは〈村里〉を表す「里」を付加し、「首里」と名付けたものとする。「里」が付加されなくとも「しゅり」と発音していた可能性がある。園比屋武の「園」は、*sara>sora>soro>sonoの変化を経て成立したと見られることから、両語は同源ということになる。したがって、「首里」も「園比屋武」も、〈首城〉〈首邑〉〈首都〉〈京〉を意味し、パラレルな関係にあると言える。

ちなみに、ソウルの語源も、新羅の首都である徐羅伐（*səra-bərə）に比定し得る。

朝鮮の史書である『三国史記』『三国遺事』には、以下の記述が見られる。

国号曰徐耶伐或云斯羅 或云斯盧 或云新羅 脱解王九年始林有鷄怪 更名鷄林

（『三国史記』地理1）

赫居世云々国号徐羅伐 又徐伐 或斯伐 或鷄林（『三国遺事』王曆）

『三国遺事』の「徐羅伐」は前掲の*səra-bərəである。『三国史記』の斯羅・斯盧・新羅は、sara・saru・siraと読むことができ、〈首〉の意味を表す。すべて、「伐」bəraの省略形と見なすことができる。「徐羅」*səraは「斯羅」*saraにさかのぼる。ソウルも同様に「伐」bəraの省略形と考えれば、次の変化を遂げたことになる。

*sara-bərə>*səra-bərə>*sə-bərə>sjə-βəl>səul（사울・ソウル）〈京〉

sjə-βəlは、səのəが重母音化し、語中のbが前後の母音によって間隙同化して有声摩擦音のβに変化したもので、15世紀韓国語の（서불）に当たる。したがって、「首里」「徐羅伐」「ソウル」は、すべて同源と言える。

5. おわりに

14世紀末の琉球国の中山王・南山王子の名前に付く「察度」「沙度」（音はサト）が、高麗時代の地方官である「使道」（音はサト）と同一であること、また琉球の地方的な王である「按司」が、新羅語の「閼智（アルチ）」と同源であること、地名の「首里」「園比屋武」「金比屋武」の「比屋武」（音はハン）も新羅語で説明できることから、遅くとも14世紀後半から、政治権力の上で韓半島の影響を大きく受けているとの予測を立てることができる。今後の課題としては、政治・宗教に関する語彙における、韓半島からの影響に関する考察が考えられる。

【注】

- (1) 外間（2000）『おもろさうし（上）』（岩波文庫）の脚注参照。
- (2) 首里城内に、「京の内」^{けお うち}と呼ばれる区域がある。城内で最も高所にあり、また最も古い「原首里城」でもある。王国時代には聖なる区域として、ここで様々な儀礼が行われた。
- (3) 曾富理神について、上田正昭氏は「神楽の命脈」（『神楽 古代の歌舞とまつり』（日本の古典芸能第1巻）（1968）で、次のように述べている。「曾富理神については、園神説と宮内省に坐す韓神二座のうち他の一神とする説などがある。だがこの（古事記）神統譜における曾富理神は韓神とは明らかに区別されているので、韓神二座のなかの一座が曾富理神であったとする説には賛成しがたい。やはり園神は曾富理神にゆかりの深い神であったとするのがよいだろう。ソホリとは『紀』（日本書紀）の神話で、ヤマタノオロチ退治の詞章（第4の1書）にみえる曾尸茂梨（そしもり）と関係のある語と思われる。なぜなら『日本書紀』の現存最古の注釈書である『釈日本紀』（述義）には、元慶講書のおりに「今の蘇之保留（そしほる）の処か」と解釈しているからである。つまりソシモリ・ソシホル・ソホリはいずれも新羅に密接な地名であった。『紀』の神話に描く曾尸茂梨が新羅に求められていることも注意されよう。とすれば韓神とは百済系の神、園神とは新羅系の神ということになる。ともにわが国に渡来してきた、いわゆる今来（いまき）の神であった」
- (4) 「郷歌」^{ひゃんが}は、新羅時代の歌謡である。日本の和歌のように、数行の短い歌謡であり、単語レベルでなく文レベルの古代朝鮮語を知るほぼ唯一の資料といえる。万葉集との違いは、現存する歌が20数首しか残っていないことである。
- (5) 「郷札」^{ひゃんちやる}は、漢字による朝鮮語の表記方法の一つである。主に新羅時代の歌謡である郷歌の表記に用いられた。古代朝鮮語の資料の一つとして重要な位置を占める。
- (6) 喜界島の地名「百之台」（現地読みはヒャヌデー）は、「郷の台」と解釈される。これまで、ヒャーとは「按司」を指し、「ヒャヌデー」で〈按司がいる山〉と解釈されているが、筆者の考察により、ヒャヌデーはハンヌダイにさかのぼり、〈造営地（開墾地）のある場所〉という意味に修正されるべきであることが分かった。「台」が〈場所〉であることについては、李（2000：175－176）参照。さらに、ダイはタイにさかのぼり、〈場所〉を意味する古代朝鮮語のtʌiに比定できる。

【参考文献】

- 安里 進（2006）『琉球の王権とグスク』（日本史リブレット42）山川出版社
- 李 炳銑（2000）『日本古代地名の研究－日韓古地名の源流と比較－』東洋書院
- 池田榮史（2012）「琉球国以前－琉球・沖縄史研究におけるグスク社会の評価をめぐって－」『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館
- 伊波普猷（1974）『伊波普猷全集』第5巻 平凡社
- 任 東權（2003）『韓日民俗文化の比較研究』岩田書院
- 上田正昭（1968）「神楽の命脈」『神楽 古代の歌舞とまつり』（日本の古典芸能第1巻）平凡社
- 内間直仁（2011）『琉球方言とウチ・ソト意識』研究社
- 大石直正・高良倉吉・高橋公明（2001）『周縁から見た中世日本』（日本の歴史14）講談社
- 小川学夫（2005）「奄美における伝承的呪詞の表現形態」『鹿児島純心女子短期大学紀要』第35号 53－72
- 沖縄古語大辞典編集委員会編（1995）『沖縄古語大辞典』角川書店
- 長 節子（2002）『中世国境海域の倭と朝鮮』吉川弘文館
- 折口信夫（1971）／谷川健一（2012）「琉球国王の出自」『琉球王権の源流』榕樹書林
- 嘉味田宗栄（1979）『琉球文学序説』至言社
- 紙屋敦之（2003）『琉球と日本・中国』（日本史リブレット43）山川出版社
- 亀井 孝（1973）『日本語系統論のみち』吉川弘文館
- 金 東昭著／栗田英二訳（2003）『韓国語変遷史』明石書店
- 来間泰男（2012）『〈流求国〉と〈南島〉－古代の日本史と沖縄史－』日本経済評論社
- 下野敏見（2005）『奄美・吐噶喇の伝統文化』南方新社
- 鈴木靖民（2007）「古代喜界島の社会と歴史的展開－城久遺跡群の意義をめぐって－」『東アジアの古代文化』第130号 大和書房
- 鈴木靖民編（2012）『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館
- 澄田直敏・野崎拓司（2007）「喜界島城久遺跡群の調査」『東アジアの古代文化』第130号 大和書房
- 徐 廷範（1989）『日本語の源流をさかのぼる－ウラル・アルタイ諸語の海へ－』徳間書店
- 高梨修（2008）「城久遺跡群とキカイガシマー琉球弧と喜界島勢力圏－」『日琉交易黎明』森話社
- 高梨修（2012）「鎌倉幕府成立前夜における南海島嶼海域の様子」『北から生まれた中世日本』高志書院
- 高良倉吉（2012）『琉球の時代－大いなる歴史像を求めて－』ちくま学芸文庫
- 谷川健一（2007）『甦る海上の道・日本と琉球』文春新書
- 谷川健一（2010）『列島縦断 地名逍遙』富山房インターナショナル
- 津波高志（2012）『東アジアの間地方交流の過去と現在－済州と沖縄・奄美を中心にして－』彩流社
- 藤堂明保編（1978）『学研漢和大辞典』学習研究社
- 仲松弥秀（1975）『神と村』伝統と現代社
- 中本正智（1976）『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局

- 中本正智（1978）『琉球語彙史の研究』三一書房
- 中本正智（1981）『図説琉球語辞典』力富書房金鶏社
- 中本正智（1990）『日本列島言語史の研究』大修館書店
- 永山修一（2007）「文献から見るキカイガシマと城久遺跡群」『東アジアの古代文化』第130号 大和書房
- 橋尾直和（2007）「東アジアにおける琉球語・アイヌ語・日本語諸方言の比較研究」『声とかたちのアイヌ・琉球史』森話社
- 橋尾直和（2008）「琉球語の接触言語的要素に関する考察」『日本語の探求一限りなきことばの知恵―（村山七郎先生生誕百年記念論文集）』北斗書房
- 橋尾直和（2009）「琉球語の比較言語学的考察―新カラジ〈頭髮〉考―」『高知女子大学紀要（文化学部編）』第58巻
- 橋尾直和（2012a）「琉球語と古代朝鮮語の比較言語学的考察」『高知県立大学紀要（文化学部編）』第61巻
- 橋尾直和（2012b）「琉球語の語源解釈に関する考察―「按司」と「オボツ・カグラ」をめぐって―」『ふまにすむす』第23号
- 波照間永吉（1999）『南島祭祀歌謡の研究』砂子屋書房
- 東恩納寛惇（1950）『南島風土記―沖縄―奄美大島地名辞典―』（東恩納寛惇全集7）沖縄文化協会・沖縄財団
- 福 寛美（2008）『喜界島・鬼の海域―キカイガシマ考―』親典社新書
- 外間守善・西郷信綱校注（1972）『日本思想大系18 おもろさうし』岩波書店
- 外間守善（1986）『沖縄の歴史と文化』中公新書
- 外間守善（2000）『おもろさうし（上・下）』岩波文庫
- 外間守善（2002）『沖縄学への道』岩波現代文庫
- 間宮厚司（2008）『沖縄古語の深層―おもろ語の探究―』森話社
- 村井章介（2006）『境界をまたぐ人びと』（日本史リブレット28）山川出版社
- 村井章介（2008）「中世日本と古琉球のはざま」『古代中世の境界領域―キカイガシマの世界―』高志書院
- 村井章介・三谷 博編（2008）『琉球からみた世界史』山川出版社
- 村山七郎（1979）『原始日本語と民族文化』三一書房
- 村山七郎（1982）『琉球語の秘密』筑摩書房
- 村山七郎（1995）『日本語の比較研究』三一書房
- 山里純一（2012）『古代の琉球弧と東アジア』吉川弘文館
- 山下欣一・谷川健一（1992）『南島の文学・民俗・歴史―「南島文学発生論」をめぐって―』三一書房
- 吉成直樹（2008）『酒とシャーマン―「おもろさうし」を読む』新典社
- 吉成直樹（2011）『琉球の成立―移住と交易の歴史―』南方新社

吉成直樹・福 寛美（2006）『琉球王国と倭寇－おもろの語る歴史－』森話社
李 基文（村山七郎監修・藤本幸夫訳）（1975）『韓国語の歴史』大修館書店

（はしお なおかず・本学教授）